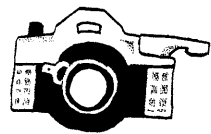


# 人形劇で育つ子どもたち

小林 美実



今年の夏、幼児のための人形劇や参加劇をしている仲間十六人とドイツへ行った。子どもたちのための人形劇が見たい、そして一回だけ、私たちもドイツの子どもたちの前で人形劇を演じてみたい。そんな願いをドイツの友人に伝え、出発した。何といても子どものための人形劇はヨーロッパが先輩である。大正時代倉橋惣三先生も、ヨーロッパの幼稚園で、先生たちの演ずる人形劇を見る子どもたちの楽しそ

うな様子に感銘をうけられたとか。まず北ドイツのハンブルグに五日間滞在した。こゝは三十年前、半年間、私をはじめ保育の研修をしたところである。さっそく小学校で交通安全教育の人形劇があるという情報が入った。演じるのは、なんと警察の交通安全教育のお巡りさんたち。日本でも、警察や消防の人たちによる腹話術、紙芝居などがある。比較もできると楽しみにでかけた。

会場は、ブレイルームのようなホール、まわりの少し高くなっている所に人形劇の舞台がつくられ、中央の低いスペースに椅子がならべてある。制服を着たお巡りさんが三名、準備をしながら笑顔で迎えてくれた。いよいよ子どもたちが三三五五入ってくる。それを舞台の前の丸椅子に座った一人のお巡りさんが、「やあ、元気にしてるかい?」「手にもってるの、なあに?」など子どもたちに声をかけて迎える、しばらくの間子どもとひとしきり会話がはずんだが、そのおしゃべりの中から、八月の誕生日の子どもを見つけ出し、舞台の前で、自分にそっくりなあやつり人形とその子どもとの愉快な「なぞなぞ」の入った会話をした。子どもたちは二人の会話を決して邪魔せず、しかし何か言いたい時は手を挙げたり、タイミングぐうまく発言したり、お巡りさんのリードもみごとだが、大勢集まったところでの態度や発言のしかたをわきまえているらしい子どもたちにも感心した。これがこれから始まる人形劇へのプ

ロログだった。

一回目の公演は、幼稚園の年長と小学一、二年生の約七十人。劇の内容は、「カスパー」という手遣い人形を主人公にした交通教育物である。子どもたちはカスパーと交通規則を守らない人や泥棒などとの間にくりひろげられるスピードある動きやことばの応酬に、体をゆすりことばを発して応援したり意見をいったりする。カスパーも子どもたちに質問し、意見をきく。ドイツ語がわからない私たちにも、子どもたちのワクワクドキドキしている気持ちが伝わって来る。びっくりしたことは、子どもたちのことばや歓声が、決して劇の邪魔にならないことである。そしてカスパーの問いかけに対する意見の本気で適切なこと。本当に劇にすっかり入りこんでいる。また、日本の子どもによく見られるテレビ風のものゝるふざげや、かるがるしい発言や行動がない。他の子どもが発言している時は黙ってきいている。二回目の公演は、小学三、四年生。もう日本では

「人形劇なんか！」という年齢である。一回目より内容が少し複雑ではあったが、交通安全教育を目的としていることでは同じである。しかしこの子どもたちは、もっと発言が多く、カスパーは時々劇の中で子どもたちと討論まではじめたのが愉快だった。

さて、人形劇の中で子どもたちが意見をいい、それに人形が答えながらストーリーが展開していくというやり方は日本では珍しいだろう。今、日本でも子どもたちが劇に興味をもち劇の世界に集中して見るようにと、積極的に子どもにはたらしかけることが試みられている。例えば、人形や俳優の誘いで劇中一緒に歌う、「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と掛け声をかける。「どっちに行った？」の質問に答えるなどである。ところがカスパー人形劇の子どもの参加はそんなものではない。答えるだけでなく、自分の考えを述べるのである。というときとワーワーとうるさく、人形遣いの声など聞こえないだろう（マークは使っていない）と想像するだろう。また、あ



▲発言したい子はこうして人さし指を高くさし上げる

まり子どもの発言にかかり過ぎて、ストーリーが進まなくなつて子どもが飽きてしまつたりしないだろうか（保育でもこういう場面がある）と心配になるだろう。ところがそんな心配は全くない。大勢が

しゃべりたい時は、みんなさっと片手を上げ、人さし指をつんと立てる。その中からカスパーが「だれにしようかな!」と面白いせりふやしぐさで選ぶ。そして発言をうまく誘導したり、みんなが納得するような方法で発言を整理してストーリーが進むようにリードしていく。

どうして保育者でもないお巡りさんが、子どもに對して保育者顔負けの即興的な柔軟な対応が出来るのだろう。その都度子どもへの反応が違うだろうに……。一回目の公演の後、下手なドイツ語で質問する私たちに、お巡りさんは二回目の舞台の後で見るようにいった。「我々がどのように劇をすすめているか、みてごらん」というわけである。

舞台裏からみてわかったこと。ストーリーは決まっている。重要なせりふは、それがストーリーをすすめる上で大事なキーワードだから、必ずいう。しかしその間は自由に即興性に満ちているのである。舞台のけこみにふたつきの小さい穴がある

ている（日本とちがい、舞台のけこみは高く、腕をいっぱいにはばして人形をつかうので、遣い手はけこみの上から子どもを見ることができない）。時々、特に子どもへの反応が大きい時、そこからちょっとのぞいて子どもの様子をたしかめながら、カスパー役の遣い手が「もう少しこのまま続けよう」「さあ、先にすすむぞ」と目くばせや手や肘や時には足で仲間にサインを送る。ちょっと手がある他の遣い手も穴からのぞいては助言をする。子どものことばを実に嬉しそうに聞き、本当に面白そうに穴からのぞいている。見ている私たちにも、心から子どもが好きで人形が好きなこの人形の遣い手たちの気持ちがよく伝わった。

このお巡りさんのグループのリーダーはカスパー役の人で、十七年のキャリアをもつ。勿論、警察官になるために警察に入ったのだが、ある時警察に人形劇で交通安全の教育をするグループがあることを知り、そのメンバーとなったそうである。彼らの日



▲交通安全教育のための人形劇をするお巡りさん。中央がカスパー役のリーダー。下に並んだ人形達が登場人物。(舞台の裏側で)

常は、幼稚園、小学校を公演してまわる他は、人形劇の創作と練習の毎日とか。その練習量、木で彫って製作した人形（これはプロの製作者が作っている）、公演回数からいってプロといってもよいだろう。他の人形劇団と違うのは、交通安全教育という目的をもっていることである。

教育という目的を持ちながら、この人形劇がたいそう面白く愉快なのはなぜだろう。まず「カスパー劇」の面白さ、「カスパー」というキャラクターにあると思う。カスパーはドイツの人形劇に昔から登場する勇気があって機転がきいてユーモアのある愉快なキャラクター。昔は多くの国の人形劇の主人公がそうであったように、時の権力者を頓智やユーモアで批判しやりこめる民衆の味方の道化だった。今は子どもたちの人形劇の主人公になっているが、顔のつくりも衣裳も道化であり、その性格も潑刺とした愉快な正義の味方であることにはかわりはない。しかも好奇心が旺盛で冒険心があり、多少おっちょこ

ちよいだが、頭の回転、身のこなしや動きの速いこと。だからいたずら大好き。劇の中では子どもたちにかわってストーリーをどんどん進めていく。つまりカスパーは、子どもたち自身なのである。だから子どもたちは、ワクワクドキドキし、自然にことばが出、応援し、意見を真剣に述べるのである。昔その性格故に大衆の間で人気であったカスパーが、今は子どもたちの代弁者としてその力を発揮しているのだ。

このカスパーを子どもの人形劇として成功させたのは、今世紀ドイツ人形劇界の第一人者、マックス・ヤコブであるが、それを教育的な目的を持つ場にも登場させる柔軟さが、生真面目でおかたいと思われているドイツにあるというのも愉快だ。マックス・ヤコブのことばに「生活の中でうんとユーモアを身につけた人だけにカスパーを操ることができるということだ。カスパーの血を自分に持っていない者は、カスパーから指を離さなければならない」とあ

る。そうだ、子どもたちはみんなカスパーの血を持っていてなのだ。それは大人から見ると、「いたずらっこ」にすぎないだろうが。それにしても、日本の子どものための劇や人形劇に多いあの教育くささは何だろう。一見教育とは無関係なカスパーが、逆に子どもたちに大切なことをしっかり伝えることができている。

マックス・ヤコブのおかげで、この子どもたちの両親は勿論、祖父母までが、「私も子どもの時、カスパーをみた。カスパーで育った」と言う。三人のお巡りさんをはじめカスパーで育った大人には、いつまでも子ども時代のカスパーの血が流れているのだ。それが大人を子どもの良き理解者にさせるのである。数日後、カスパーではないが、十分にカスパーの性格を持つ男の子を主人公にしたプロのマリオネットをみた。大きい豪華な舞台、魔法使いも登場するメルヘンの世界は、また別の楽しさがあった。それでもなお子どもたちと問答する所が何箇所

かあって、子どもたちにとって、劇中発言することに参加する人形劇がいかに自然なものになっているかがよくわかった。

人形劇を面白く気持ちいい公演にしている理由の一つに、観客である子どもたちがある。大きい障害者施設内の小学校で障害児を含む三、四年生約五十名に私たちが公演した時のことである。ことばの問題もあるので、ことばを使わない音楽によるショー的なものを演じた。このような人形劇をあまり見慣れていない子どもということだったが、その見方のすばらしいこと。人形の動きだけの劇的な表現にいい表情や歓声をあげて、しっかり反応するのだった。公演後のことである。「人形を持ってみたい」という申し出に、多少心配しながら（というのは、日本では往々にして乱暴にあつかう子どもがいる）人形を全部出してみた。それからの子どもたちの行動は実に感動的だった。手にとると、近くの友達と人形で話しかけ、抱き合い、ゆっくりからみあう。

その中には障害をもった子どももいる。あちこちで小さい短いドラマが生まれていると感じた。この子どもたちは、日本の子どもたちのように、幼稚園や学校で発表会を目的に劇の練習を毎日毎日やらされたりすることはない。しかし、いかに日常的に劇的なあそびを楽しみ、人形劇などのよき観客になっているか、ということだろう。つまり人形劇をはじめ、子どもの文化として劇的なものがすっかり生活の中に根つき、それによって子どもたちが生きて育っているのである。マックス・ヤコブの自叙伝を読むと、彼が子どものためのカスパー劇を始めたころ、学校の校長をはじめ大人たちの無理解に悩まされたことが書いてある。小さい人形の劇なのに何百人もの子どもを集めたり、子どもだけ置いて先生はさっさと去ってしまうなどであるが、残念ながら日本はまだその段階である。これを子どもの文化というなら、貧しい文化だ。

日本にも、文楽をはじめ各地に伝承されている人

形劇がある。アジア各地域にも、インドネシアのワヤンのようなすばらしいものが沢山ある。しかしそこから子どものためのものを生み出すことはまだ出ていない。そこには、あそびや祭や習慣の伝承を含め、難しい問題がある。これからの、子どもの文化をめぐる大きな問題だろう。

ドイツには、ミュンヘンのマリオネット劇場のような大変芸術性の高い人形劇もある。カスパーで

◀カスパーはみんなこの様に道化のかっこうをしている



育った人々は、大人になってからも人形劇の面白さを堪能しているのであろう。ハンブルクを離れるとき、今年の秋冬の子どものための人形劇のポスターももらった。大きなカスパー人形の絵とともに沢山のカスパー劇の演目が紹介されていた。今頃休日にはたくさんの子どもたちが、お父さんやお母さんと一緒に人形劇を楽しんでいるのだろう、その姿が目に浮かんでくる。  
(玉仙学園短期大学)

※文中のマックス・ヤコブに関することばの引用は清水

俊夫訳 『マックス・ヤコブ自叙伝』(一九九六年十月

出版。本書は、人形劇団ブーク・日本ウニマ(〇三―

三三七九―三三七〇)で購入可能です)より

※マックス・ヤコブについて

一八八〇―一九六九 ドイツ生 一九五九―一九六九

ウニマ(国際人形劇連盟) 会長